

養護教諭と連携した 中学生の性教育プログラム開発

高橋佐和子＊¹⁾，伊藤純子¹⁾，渥美早百合²⁾，石川志奈³⁾，千徳茜⁴⁾
1)聖隷クリストファー大学，2)細江中学校，3)三方原中学校，4)八幡中学校

【目的】 地域の複数の中学校の養護教諭と講演担当者が話し合いながら，性教育の講演プログラム（60分間）を開発すること および そのプログラムを効果すること。

■ 中学校の性教育の実態と課題

学校における性教育の必要性は認識されているものの，テーマの扱いにくさや思春期の生徒との関わりの難しさから，一般教員には敬遠されがち。

中学生の実態

インターネットを介した問題の増加
→プライベートな画像の流出・いじめ
→アダルトサイトへの早期からの暴露
→チャット等を介した性犯罪 など



■ 養護教諭の役割と課題

養護教諭は，心身の成長・発達に関する専門的知識を持つ上，学校で発生するいじめや性の問題行動等の情報が集まりやすい立場にあるため，生徒の性に関する課題を把握しやすいしかし，それらをプログラムの内容や方法に生かしきれていない。

養護教諭の課題

養護教諭は，学校に1人しか配置されていない
→性教育の計画にさける時間が限られている
→話し合う相手がいない

■ 養護教諭との話し合いによるプログラム開発

研究メンバー（講演担当者：大学教員2名，養護教諭3名）による会議を4回（2ヶ月に1回程度）行った。

養護教諭と話し合った内容

中学生の性に関する課題・関連する事項について

- 生活実態
- 性に関する問題行動
- 各学校での性教育や指導の実施状況
- 実情を踏まえた効果的な教育方法について



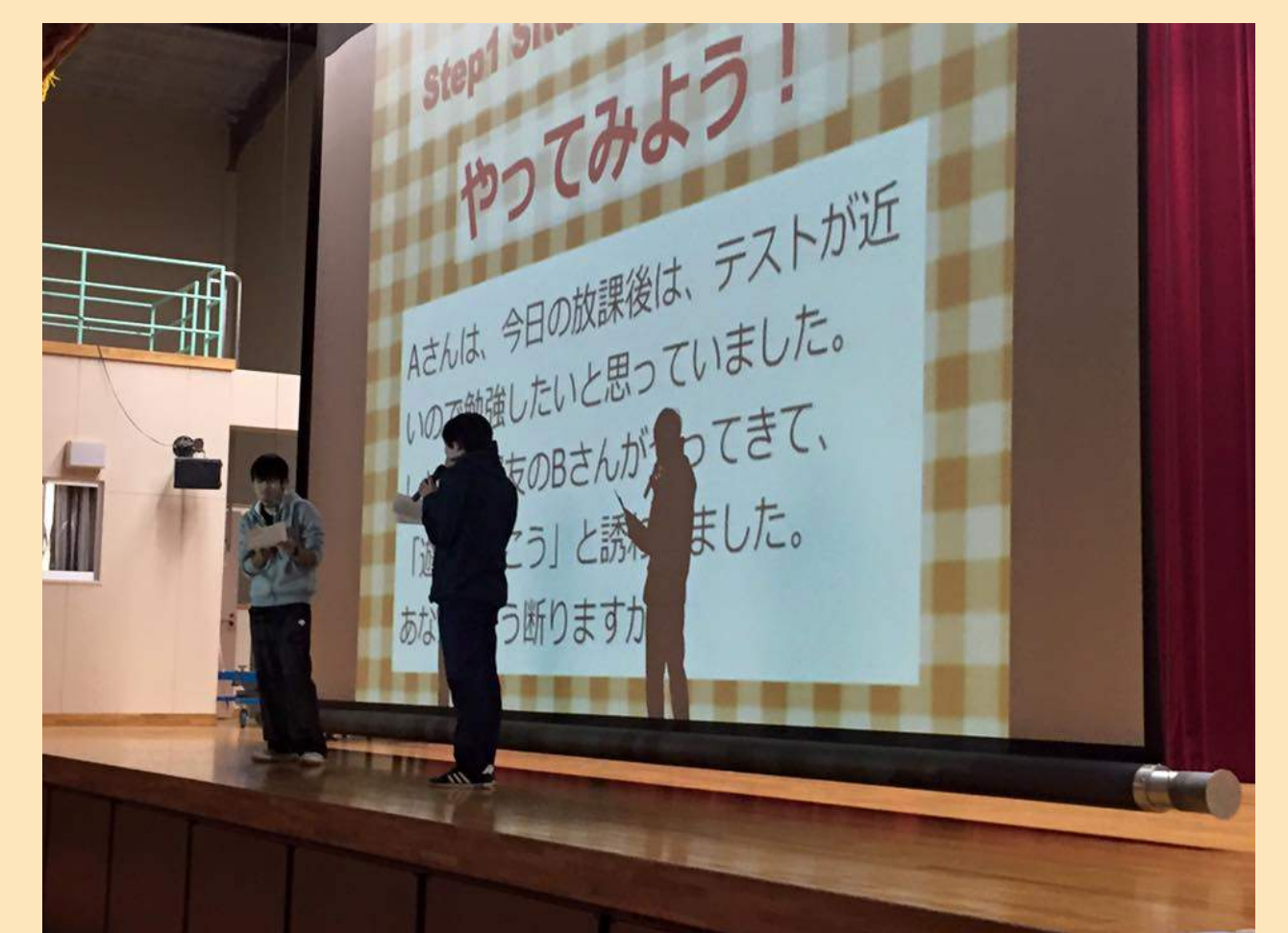
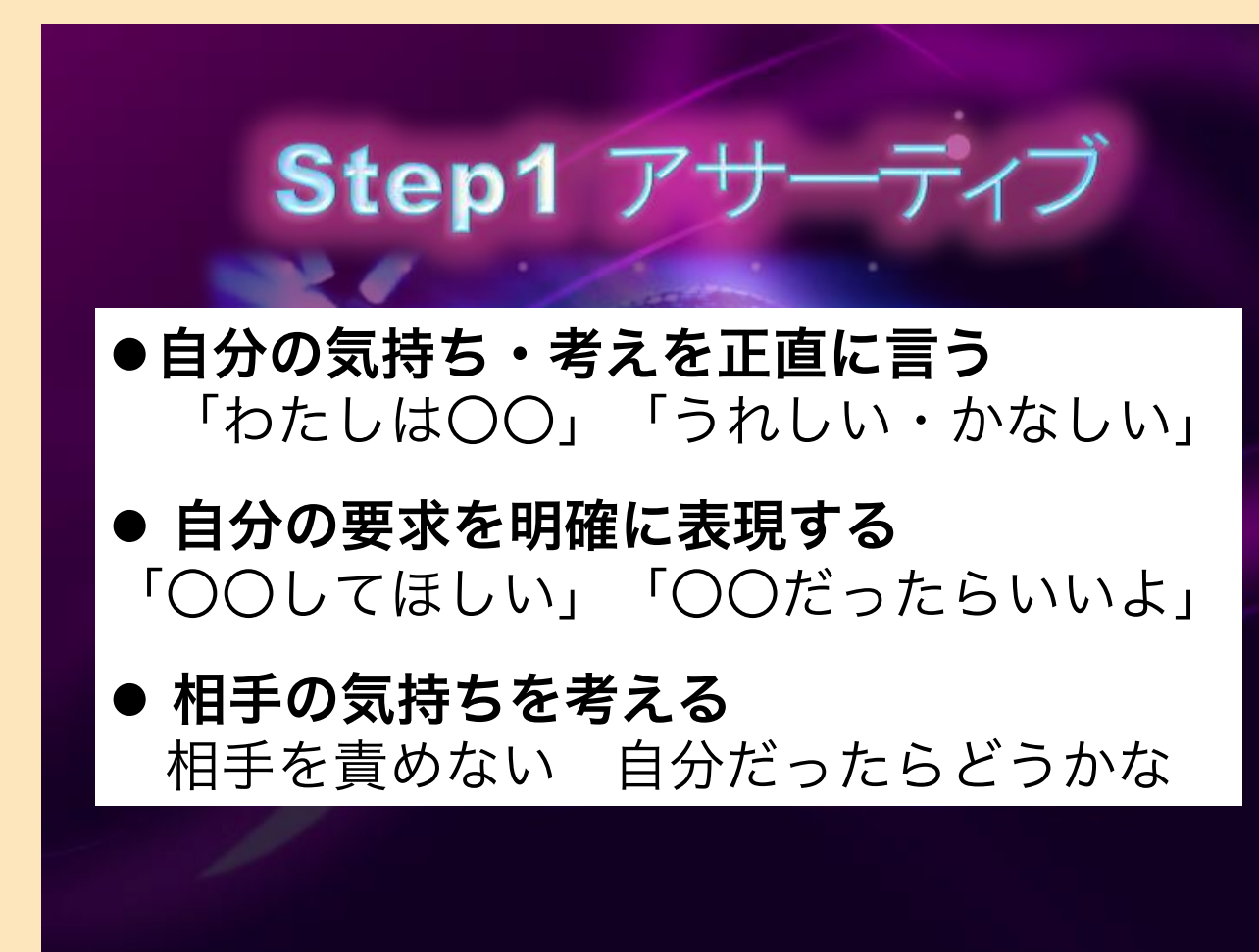
研究者が試作したプログラム案を提示し，これをもとに話し合い，その内容から案を修正することを繰り返した。

■ 開発したプログラム

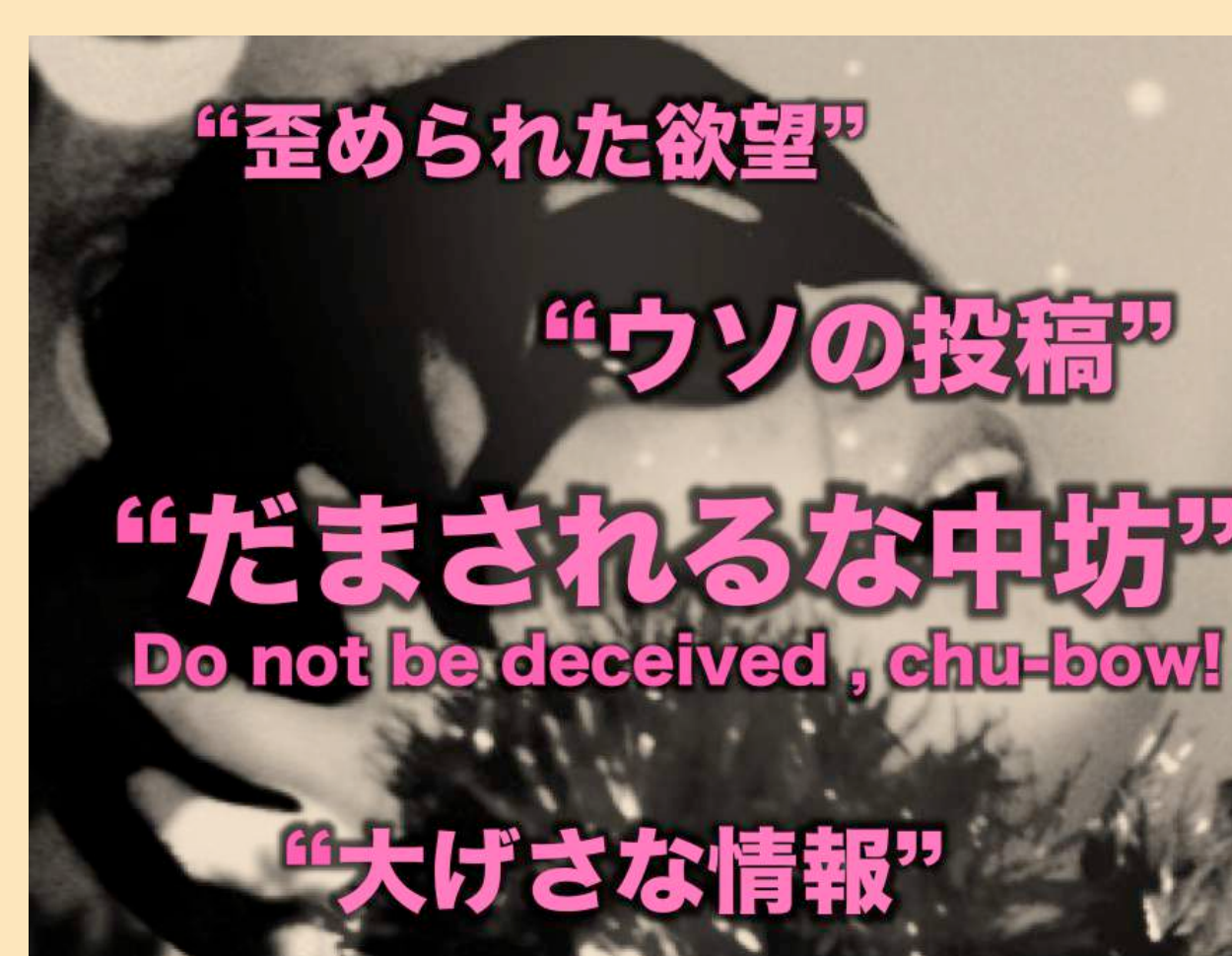
プログラムの前後には，生徒に対し，性の意識に関するアンケートを実施した。

養護教諭との話し合いによる開発のポイント

- 「断る」ことが苦手な生徒が多いため，コミュニケーション力やできる自信高める工夫が必要
→アサーション・ロールプレイを取り入れた



- 公演中，中学生は周りの目が気になることや，恥ずかしさから，下を向く姿が見られるため，恥ずかしさを軽減し，興味を引き付けるための工夫が必要
→中学生の好む視覚的な効果や音楽を活用したパワーポイントを教材に使用
→テレビの相談コーナーという場面設定で演劇調に講演を進めた



■ 開発したプログラムの効果

生徒への事前事後アンケートの結果、「性の悩みについて相談できる」「友だちより早く性交渉を経験したい」など，調査した性に関する意識のほとんどが改善した。

プログラム開発のプロセスを通して，養護教諭から「子どもの実態を他校と比較しながら考えることができた」「教育方法について，新しい知識を得ることができた」などの感想を得た養護教諭の資質・能力にも肯定的な効果があった。

【研究のまとめ】 養護教諭と情報交換をし合いながら性教育を作り上げることで，中学生の知識・意欲を向上させるのみでなく，養護教諭の力量の向上にも寄与できる可能性がある。